博士学位論文審査要旨

２０１０年1月１９日

論 文 題 目：　滝沢克己のキリスト論的神学と非キリスト教世界
学位申請者：　金 珍熙（きむ じんひ）
審 査 委 員：
　主　査：　神学研究科　教授　水谷　　誠
　副　査：　神学研究科　教授　森　　孝一
　副　査：　神学研究科　教授　原　　誠

要　　旨：

本論文は、西田幾多郎に学び、彼の推薦でドイツのボンでカール・バルトに師事した滝沢克己(1909-1984)の宗教思想について神学的な見地からその解明を志すものである。滝沢は、「インマヌエル」の原理的一点に集中し、神と人との間に不可分、不可同に加えて不可逆の関係があることを指摘して、キリスト教の外にも真理契機の存在を認めるキリスト論にもとづく独創的な神学を構築した。この、キリスト教界の外部にも真理契機を認める滝沢の神学は、1960 年代に宗教間対話の先駆として高く評価されたが、それにとどまらず、非キリスト教世界における神学の可能性を考慮する時になお多くの刺激的な着眼点を有している。本論文は、彼の青年期から続く問題意識、バルトのキリスト論との徹底した対話に基づいて独自に構築された神人キリストの理解、このキリスト論を根拠として展開された宗教間対話、キリスト教の内部と外部をともに視野に置くこのキリスト論から生じる宣教論的課題という四つの視点を設定して滝沢の神学的論理を検証するものである。

まず、序論で研究史を振り返り、滝沢の神学的努力はいまだなお包括的にその全貌が明らかにされていないことが指摘される。第１章では、滝沢のキリスト教界内部とその外部の両者を視野に入れた問題意識は、それを原理的に可能だが事実的に不可能だとするバルトに対する疑問としてすでにボンでの学業の時代に提出されていたこと、それがバルトに師事する以前に西田に学ぶことを通して伏線として敷かれていたことを確認する。第２章では、バルトのキリスト論的集中の視点に立ちつつも、神が人に向けて自己を限定したキリストの出来事において、この出来事自体によって成立する神と人との間の和解の現実性と、この和解のキリストの徴として我々の前に現れ出た神人イエスとの触れ合いの中で自覚的に信仰に目覚める我々の現実性の、両次元を同時に措定することで、キリスト教の外の世界を包摂する地平を滝沢の神学が有していることが明らかにされる。

第３章では、久松真一との間でなされた仏教とキリスト教との宗教間対話を事例にして、滝沢の神学はすぐれて諸宗教の共存を目指すものであることを確認する。彼の理解では、キリスト教が非キリスト教的世界を受容するためのキリスト論的根拠は、同時に仏教がキリスト教的世界を認容する根拠ともなることが示される。第４章では、滝沢神学は非キリスト教文化圏における宣教論として有効であったことが 1960 年代のキリスト教の土着化論を俎上に載せつつ明らかにされる。そして、神の自己限定に基づいて成立する非キリスト教界の受容が、神人イエスに対応可能な質を持つものとして措定することの現実的困難さもまた滝沢の戦時中の国家主義的発言の中にあることを認めて、神学思想がその担い手たる思想家の歴史的現実に対する批判的機能を十全に持ち得ず、理論的脆弱性を滝沢もまた免れえなかったことが明示される。

本論文は、滝沢の、初期から成熟した後期にいたるまでの関係テキストを神学的視点から詳細に分析・検討したものである。このことをとおして、本論文は、取り扱われた異なる主題の底流に一貫して存在するインマヌエルにもとづくキリスト論理解を抽出し、この理解は非キリスト教文化圏における神学的作業においてキリスト教世界の内部と外部とを一様に原理的に承認する質を持っていることを明らかにした。滝沢の神学思想が持つ視界の全体をキリスト論を軸にして取り扱った現時点における唯一の論考として、本論文は博士(神学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。

総合試験結果の要旨

２０１０年1月１９日

論 文 題 目：　滝沢克己のキリスト論的神学と非キリスト教世界
学位申請者：　　金 珍熙（きむ じんひ）
審 査 委 員：
　主　査：　神学研究科　教授　水谷　　誠
　副　査：　神学研究科　教授　森　　孝一
　副　査：　神学研究科　教授　原　　誠

要　　旨：

金珍熙氏は、2006 年 3 月に同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、同年 4 月に後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たすと共に、学位論文を提出した。2010 年 1 月 19 日 14 時から、神学研究科委員会は総合試験を実施し、金氏から充分な神学的素養を背景にした的確な応答を受け、また学位請求論文の主題領域について深い認識を有していることを確認した。また、語学試験を通じて、研究に必要な語学力（日本語、英語）を充分に有していることが確認された。

以上の結果により、総合試験に合格と判定した。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 滝沢克己のキリスト論的神学と非キリスト教世界

氏　　名： 金珍熙（キム・ジンヒ）

要　　旨：

滝沢克己（1909-1984）は、激動の20世紀を生きた日本の思想家である。滝沢が主に携わった分野は哲学ではあるが、彼は哲学だけではなく、神学や文学、経済学など、多岐にわたる主題に取り組んだ。しかし、このような多様性にもかかわらず、彼が終始一貫して主張したものは、神が私たちと共にいるという「インマヌエル」である。それは、彼が師として仰いだ西田の勧めにより、西田に並ぶもう一人の師であった神学者バルトの下で形成したものである。また、それは神学の分野で神学的なものとして形成され、彼はインマヌエルを中心とする「滝沢神学」を展開した。彼の思想の中で最も評価され、その結果としてドイツのハイデルベルグ大学から与えられた名誉の学位は神学博士である。このようなことから、本稿では滝沢の思想の核心であるインマヌエルを神学的なものとして捉え、その神学的な展開に注目する。

滝沢は、神と人との関係が「不可分・不可同」であると同時に、「不可逆」的な関係にあると主張した。また、その関係から一つの事柄をめぐって、神と人それぞれにおける意味合いが生じるという「二義的な構造」を明らかにした。これらの主張は、滝沢のユニークな神学的展開として理解されている。また、滝沢神学は、とりわけ宗教間の対話という側面で高く評価されてきた。例えば、現代日本における最も生産的なキリスト教と仏教との対話は、滝沢克己による久松真一との対話から始まると評され、また、彼の処女作から絶筆に至るその展開が宗教間の対話のためのものであり、滝沢はそのため彼の生涯を捧げたとも言われている。このような滝沢神学における独創性と神学的な意義に関する評価には、今なお、私たちが注目する価値が十分にあると考えられる。

ところで、このように独自の神学を構築し、高い評価を受けてきた滝沢神学は、現在、その意義を十分に理解されているのであろうか。その問題の一例として、滝沢神学に関する評価と理解が宗教間の対話の側面に集中していることを見出す。滝沢が宗教間の対話に積極的に取り組みはじめたのは、『仏教とキリスト教』を書き上げた1950年前後からである。ところで、ここで看過してはならないのは、不可逆と二義的な構造という滝沢神学の骨子が成立したのは、滝沢のドイツ留学の時期である1935年である。すなわち、滝沢が宗教間の対話に取り組むおよそ15年前に、滝沢神学は何らかの「原因」と「目的」によってすでに成立していたのである。滝沢神学はいったい何を目的として形成され、彼の後の神学的な展開および宗教間の対話につながっていくのであろうか。

問題はこのような滝沢神学に関する理解およびその評価に限られない。滝沢神学は、そのユニークさと神学的な意義が高く評価されてきた。しかし、滝沢神学はいくつかの論争を引き起こしたものの、神学界および教会に大きな影響を与えていない。むしろ、彼の神学には教会との距離の問題が提起されている。なぜ高く評価される一つの神学が、その神学の受容層である教会には注目されないという皮肉な現実が起こっているのであろうか。

さらには、滝沢神学は今日における私たちにとって、いかなるものを示唆しているかという問題がある。滝沢神学は、その成立から70年以上の月日が経ち、私たちの神学的な状況も大きく

変わった。もし、滝沢神学の問題意識および主張が、すでに過去のものではなく、時代を超えて私たちにも共有され、依然として意義あるものであるならば、滝沢神学は今日を生きる私たちに与えられている神学的な課題の中で、いかなるものに共鳴し得るのであろうか。

本稿はこのような問題意識から、滝沢神学をより適切に評価し、そこから今日的な神学的な課題を見出すこと、また、それを私たちの立場において批判的に考察することを目的とする。そのため、本稿は次のような方向において展開する。第一に、滝沢神学における問題意識と展開を明らかかする。第二に、既存の滝沢神学に関する理解を検討し、その妥当性を問い直す。第三に、滝沢神学を狭義には今日の日本、広義には北東アジアにおけるキリスト教という私たちの状況から批判的に考察し、その意義を見出す。

本稿は、このような方向性において、次のように展開する。まず第一章では、滝沢神学の問題意識を究明する。本稿では、滝沢神学の成立をめぐる彼自身の問題意識が、滝沢神学の問題意識そのものを最も鮮明に表していると判断し、初期の滝沢の著作とその背景に焦点を当てる。そして、教会の内と外という二つの軸を弁証法的に統合していくことに、滝沢の問題意識があることを明らかにする。

次に、第二章においては、滝沢神学がいかなる性格を有するにいたったかを明らかにする。そのために、滝沢神学の核心である「インマヌエル」と「二義的な構造」の意味を明らかにする。また、この滝沢の神学的な主張に対する反響の中から、イエス・キリストの媒介性の問題に注目する。そして、キリスト論を中心とする滝沢神学の展開は、滝沢の問題意識に含まれていたものが、教会の外という軸を背景にして教会の内という軸で開花したものであると言えるが、その意義はキリスト教の伝統的な理解と新しい理解をつなぐ点にあることを明らかにする。

第三章においては、滝沢神学における宗教間の対話の側面に注目する。そのために、とりわけ仏教をめぐる久松真一との対話に焦点を当てる。また、彼の宗教間の対話に対する肯定的・否定的な諸評価を確認し、その妥当性を問う。そして、滝沢の宗教間の対話は、キリスト論をめぐる思索とは逆に、彼の問題意識に含まれていたものが、教会の内という軸を背景に教会の外という軸へと開花した展開であり、その意義は教会の内と外をつなぐ点にあることを示唆する。

第四章においては、キリスト教が社会・文化的な背景と一致しない宣教地にという、私たちの神学的な課題を念頭において滝沢神学を批判的に検討する。そのために、滝沢神学における宣教論的な側面を浮き彫りにし、それが宣教地におけるキリスト教の営みを支える神学的な基盤になり得ることを明らかにする。また、その具体的な一例として、1960年代の日本における土着化議論を取り上げ、滝沢神学に即して検討する。さらに、このような私たちの神学的な課題に対して滝沢神学を生かしていくことを考える際に提起し得る問題点を、教会との距離と天皇制の問題として浮き彫りにし、滝沢神学における二つ軸を中心に検討する。

本稿は以上の展開を踏まえ、次のことを結論として提示する。まず、滝沢神学の問題意識とその展開に関する理解である。滝沢神学は、滝沢の問題意識に含まれていたバルトと西田の両軸が、三つの視点において展開されたものである。まず一つは、キリスト論を中心とする展開である。これは、教会の外を背景にし、教会の内で図られた神学論理であり、伝統的な理解と新しい理解をつなぐ特性をもつものである。もう一つは、宗教間の対話である。これは、教会の内を背景にし、教会の外に向って企てられた相互弁証、また、相互批判の試みであり、教会の内と外をつなぐ特徴をもつものである。第三の視点は、以上のような二つの展開が相まってはじめて理解される宣教論的な視点である。滝沢神学における教会の内と外への二つの視点は、以上のように教会の内と外が理解しあうような展開を志向しており、宣教地におけるキリスト教の営みを支える神学的な基盤になり得るものである。

次に、滝沢神学は上記の三つの展開において、それぞれ異なる意義を持っているということで

ある。滝沢神学の核心であるインマヌエルとそこにおける不可逆的な関係は、神の前における人の謙遜さを要求するものである。これが、キリスト論を中心として展開する時、教会の内か外かに関係なく活動する神の自己限定において、キリスト教は教会の外における神の活動を認めざるを得ない。また、宗教間の対話においては、そのような不可逆の視点が仏教徒にも要求されるために、仏教徒は仏教の外におけるイエス・キリストのような人となった神の子という唯一の基準を受け止める必要がある。さらに、宣教論的な展開においては、宣教地におけるキリスト教の営みの中で出会う固有の文化に対して、一方では、それをどこまでもインマヌエルに基づいたものとして受け容れながらも、他方では、不可逆の視点において偶像崇拝に対する対決をなさなければならない。

最後に、滝沢神学の課題は、宣教論的な展開に見出すことができるということである。そこには滝沢の限界と滝沢神学の限界という二つの側面がある。滝沢の限界とは、バルトを中心とする教会の内という軸の歪みと西田を中心とする教会の外という軸の暴走である。教会の内という軸の歪みによって、彼は日本における彼の神学的な実存を直視することができず、日本におけるキリスト教の自己弁証と歴史的な反省という課題に向き合うことができなかった。また、教会の外という軸の暴走によって、自らの伝統に対する過度な愛着をもたらし、滝沢神学の独特の批判的な視点を失ってしまう。滝沢神学の限界とは、不可逆に基づきながらも、インマヌエルとそれを指し示す徴との間における完全な自己限定および相互限定においてのみ、イエス・キリストのような基準性が成立するという点を十分に展開しなかったことにある。このことによって、そのインマヌエルを体現したイエス・キリストの意義があいまいにされてしまった。滝沢神学におけるこれらの限界は、インマヌエルという原事実に徹底的に基づき、その他を批判的に対象化していくこと、また、滝沢神学におけるインマヌエルとイエス・キリストという唯一（質的な意味）の基準において、私たちを取り囲むあらゆるものにかかわっていくことを課題として示している。